

森林

- 1 ギョクシンカ - スダジイ群集
- 2 エゴノキ群落・カキバカンコノキ群落
- 3 半マングロープ低木林（オオハマボウ群落・イボタクサギ群落）
- 4 半マングロープ亜高木林（サキシマスオウノキ群落）
- 5 アカテツ - ハマビワ群集
- 6 オヒルギ群落
- 7 海岸林（アダン群集等）

草地

- 8 ソナレシバ群落
- 9 湿性草本植物群落（チゴザサ - ハナカモノハシ群落等）
- 10 ダンチク群落
- 11 リュウキュウチク群落

その他

- 10 開放水域・自然裸地

図7のようにオヒルギ群落は小河川が流入する湾奥にあり、かつて水田であった後背の湿地にマングロープ周辺林のイボタクサギ群落やオオハマボウ群落が発達している。海水の影響の無くなった湿潤地にはカキバカンコノキ群落やエゴノキ群落が成立する。また、湾の入口の北側に海岸林のアダン群集や風衝性の沿海地林のアカテツ - ハマビワ群集があり、その後背にかつて水田があったが現在水田放棄地になり、湿生草本植物群落やリュウキュウチク群落が見られる。湾は全てギョクシンカ - スダジイ群集で囲まれているが、2008年次の調査まではモザイク状にリュウキュウマツ群落とギョクシンカ - スダジイ群集が配置されていたが、マツクイムシ被害によって群落は全滅し、単純化された植生分布になっている。

(5) 群落構造図作成

調査表22の群落について接線法による毎木調査を行った。

群落は半球状になっており、潮線に平行な面と、潮線に垂直な面の二つの調査ゾーンを設定した。潮線に平行な面は両端を斜面の駆け上がり部分に設定し、その上下で群落断面模式図を作成した。（図-8）

一方、潮線に向かって垂直な面は植生帯の先端からかつて畑作が行われその畔間に当たるソテツ植栽面までである。（図-9）

サキシマスオウノキ群落の典型的なものはオキナワアナジャコが造った巣穴を含む泥湿地上に形成さ

れているものであるが、耕地が少ない島嶼部においては、埋め立てられ水田や畑地として利用されている。本調査地においてもかつてはソテツ植栽面近くまで湿地があり、そこを埋め立てリュウキュウチクが生えだしている付近まで畑地化されていた形跡がある。埋め立て前には最大で幅50m奥行き20m前後のサキシマスオウノキ群落があったと推定される。

埋め立てによって耕作地を確保し、その後背の斜面も段畑として耕作して有効な土地利用を行っていたが、狭められたサキシマスオウノキ群落は伐採されることなく防風防潮林として活用されていた。そのため胸高直径が70cm以上ある大径木が残存している。この個体は板根の高さが87cm長さが397cmに達するものもあり堂々とした樹形である。

この耕作地も海上保安庁の空中写真から1977年頃にはすでに放棄されていると推測される。

また、サキシマスオウノキ群落は北緯28°07'48.7"あり、東経129°15'50.3"にもあり、胸高直径36~44cm、10m前後の個体が2本あり、安定的な立地である。

6 呑之浦のマングロープ林およびマングロープ周辺林について

(1) マングロープ林について

呑之浦で形成されているマングロープ林は現在のところオヒルギ群落のみである。マングロープを構成する樹種としてメヒルギも分布しているが個体数も少なく低被度である。オヒルギ群落の高さは1.5m前後のところが大半であるが、中に5mに達する群落も流入する小河川の流路に沿って成立している。

オヒルギは奄美大島龍郷町浦にメヒルギ群落の末端部で海水の流入する水路に沿って1m前後の個体が7本数えられたが、道路工事に伴う水辺の改修工事近傍に移植され、多くは枯死しているが稚苗が10本生き残っている。また、役勝川、住用川の河口北緯28度15分22.9秒、東経129度24分33.8秒でもメヒルギ群落の辺縁部に高さ6m、幅10m、長さ15m前後で胸高直径が25cm前後のオヒルギが優占する群落が成立している。役勝川、住用川の河口でのオヒルギとメヒルギの種間関係ははなはだ興味深い。海側の先端には1.5m前後のメヒルギ単純群落となり、オヒルギは分布していない。メヒルギ群落の群落高が4m程度になる植生帯の先端から10m程度のところから、1m前後のオヒルギが低木層に侵入し、周辺部になると徐々に高くなり、陸地との隣接部ではメヒルギと同様の高さまで発達している。

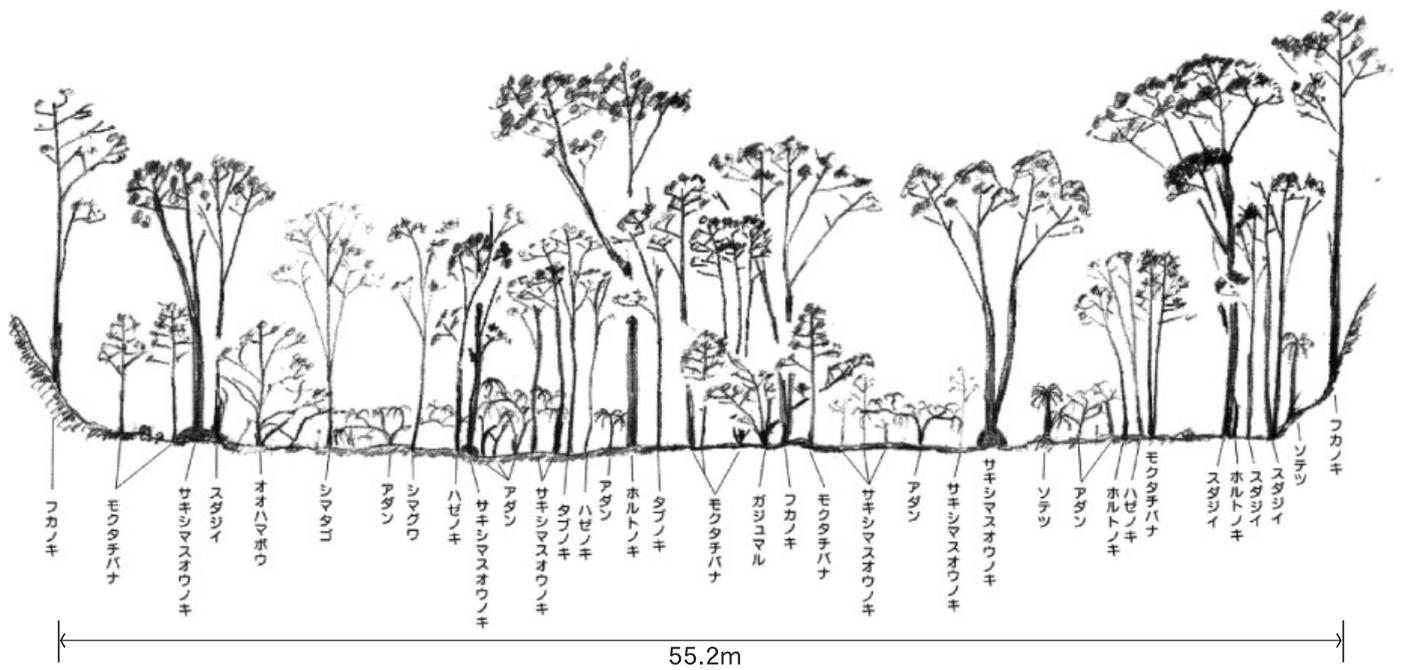


図-8 サキシマスオウノキ群落横断面構式図

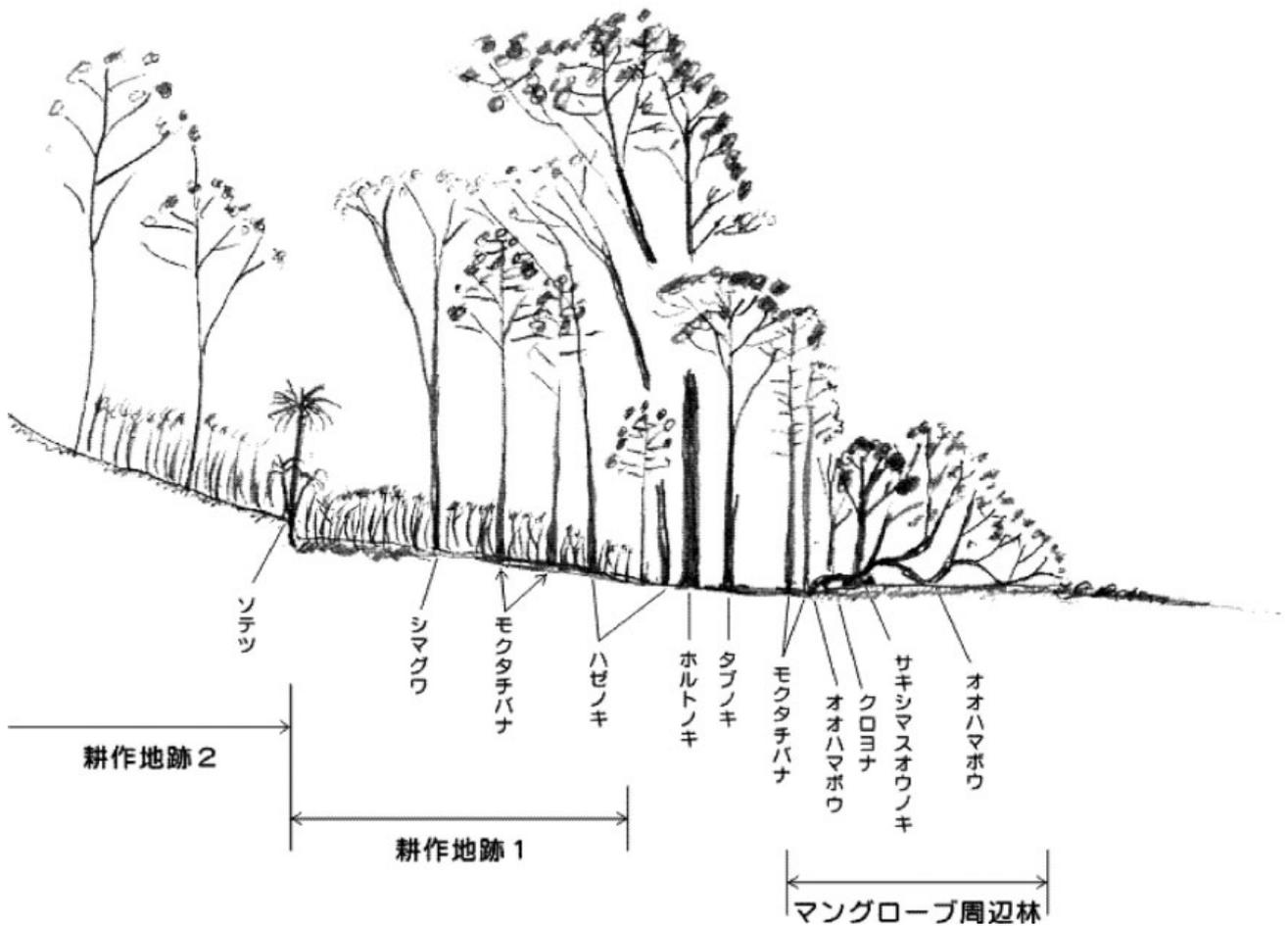


図-9 サキシマスオウノキ群落縦断面構式図

表-6 サキシマスホウノキ群落毎木調査票(横断面)

番号	起点からの位置	樹種名	DBH (cm)	樹高 (m)
0				
1	0	スタジイ	22	12
1	0	スタジイ	22	12
2	1	スタジイ	11	8
3	2	ホルトノキ	13	13
4	2.7	スタジイ	52	16
5	5.2	モクダチバナ	18	8
5	5.2	モクダチバナ	10	8
6	5.4	ハゼノキ	17	8
7	6.1	ホルトノキ	22	7
8	7.3	アダン	9	2.5
9	8.7	アダン	10	2.5
10	11.6	ソテツ	18	2
11	12.7	サキシマスホウノキ	50	12
11	12.7	サキシマスホウノキ	88	12
12	16	アダン	11	2.5
13	20.9	モクダチバナ	12	6
14	22.7	フカノキ	31	13
14	22.7	フカノキ	27	13
15	22.9	ガジュマル	15	5
	22.9	ガジュマル	8	5
	22.9	ガジュマル	6	5
	22.9	ガジュマル	9	5
	22.9	ガジュマル	6	5
16	24.8	モクダチバナ	21	10
	24.8	モクダチバナ	12	10
	24.8	モクダチバナ	18	10
17	25.2	モクダチバナ	12	6
18	25.8	モクダチバナ	30	0.1
	25.8	モクダチバナ	13	0.1
19	27.7	タブノキ	20	10
20	29.2	ホルトノキ	59	16
21	31.4	アダン	5	2
22	32.3	タブノキ	13	8
23	31.7	ハゼノキ	22	9
	31.7	ハゼノキ	21	9
24	32.6	サキシマスホウノキ	22	8
25	33.7	サキシマスホウノキ	13	8
26	35.5	アダン	9	3
27	37.4	サキシマスホウノキ	22	9
28	36.9	アダン	8	2.5
29	38	アダン	8	2.5
30	37.7	ハゼノキ	25	10
31	39.2	シマグワ	8	7
32	41.4	アダン	10	3
33	43.7	シマダゴ	22	9
34	45.7	オオハマボウ	7	6
35	47.9	スタジイ	33	13
36	48.7	サキシマスホウノキ	90	12
37	50.8	モクダチバナ	16	6
38	52.8	モクダチバナ	6	5
39	55.2	フカノキ	27	12

表-7 サキシマスホウノキ群落毎木調査票(縦断面)

番号	起点からの距離	樹種名	DBH (cm)	樹高 (m)
	0			
1	7	オオハマボウ	15.5	3.4
2	5.65	サキシマスホウノキ	5.7	2.8
3	7	クロヨナ	8.5	3.4
4	7.5	モクダチバナ	8.4	7
5	7.9	モクダチバナ	27.4	8.4
6	10	タブノキ	20.2	9.6
7	10.6	ホルトノキ	59	16
8	12.5	モクダチバナ	5.9	5.4
9	11.3	ハゼノキ	26	12.2
10	14.2	ハゼノキ	25.2	13.2
11	15.5	モクダチバナ	15	8
12	17	モクダチバナ	15.8	10.4
13	19	シマグワ	12.9	8.2
14	23	ソテツ	31.5	5.4
	24			

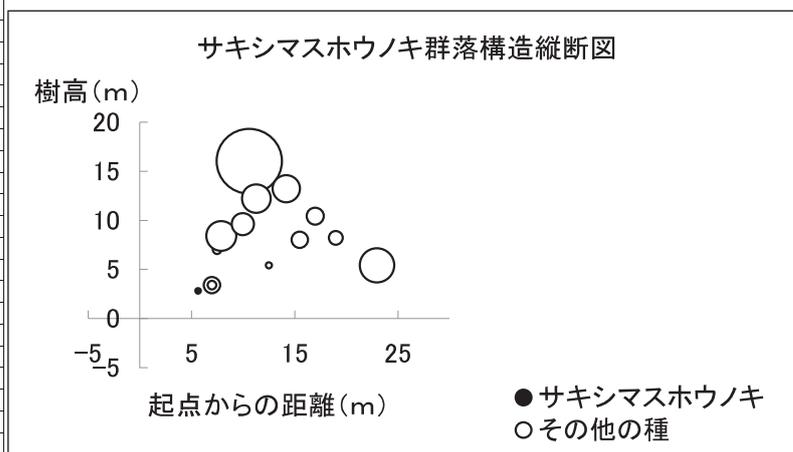


図-9 サキシマスオウノキ群落縦断面図

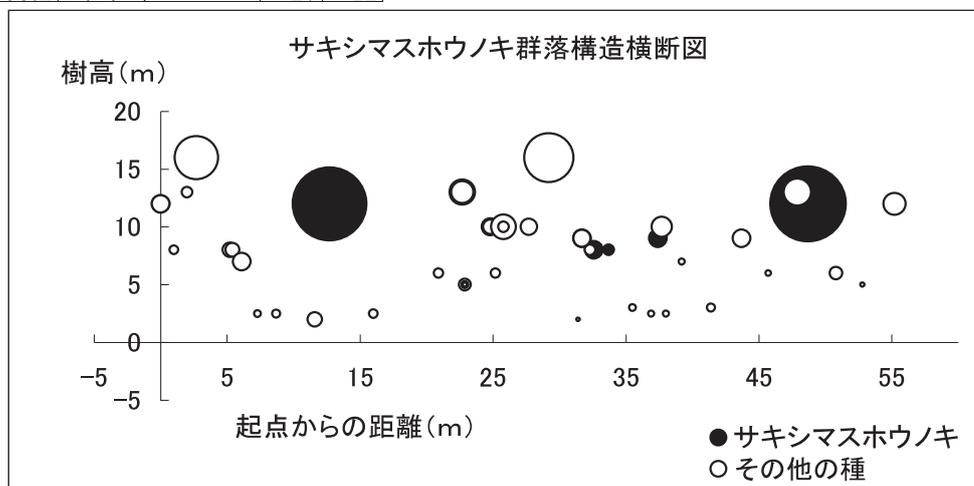


図-10 サキシマスオウノキ群落横断面図

奄美大島はオヒルギの自生の北限地帯にあたり、生育には温度条件が厳しいため、直接外気にさらされる部分では生育が制限されていると考えられている。(小滝1997)

呑之浦のオヒルギ自生地は内湾にあり、汀線と耕作地の標高差が1mもないことから、干満や台風等の高潮による潮位の変動も少ない。このため、オヒルギ自生の北限地帯にありながらも潮位の影響が少なく、より緩和された環境になっているため、メヒルギを欠いても生育が可能となっていると推測される。とはいえ、環境の厳しさから先端部は1m前後の高さで、周辺に向かうほど高くなり、5m前後に発達している。

本群落は、1977年海上保安庁撮影の空中写真にもほぼ同じ位置に確認できており、安定的な群落といえる。また現在の面積は2,000m²~3,000m²、1m以上のオヒルギが推定株数9,000本程度と推定される。

(2) マングローブ周辺林について

マングローブは潮間帯に成立する森林であるが、高潮時に海水が流入する汽水湿地に成立する森林を半マングローブ林、あるいはマングローブ周辺林として取り扱われている。

マングローブ周辺林として鹿児島県本土ではハマボウ群落が発達し、万之瀬川河口には国の天然記念物に指定されている。

イボタクサギは種子島以南に分布し、宝島、喜界島でもマングローブを欠いた汽水域の湿地でびっしりとした群落をつくる。

オオハマボウは種子島西之表市美浜海岸を北限とし、悪石島、宝島、奄美諸島に分布し、湿潤な砂浜や汽水域に環境に広く単純な群落をつくり、奄美大島以南では群落の規模、高さとも見事な景観となる。

サキシマスオウノキはマングローブ周辺林を構成する樹木で泥湿地に大きな板根をつくること、果実がウルトラマンの仮面に似るユニークな形態でしばしば注目されている。西表島古見の前良川河口にある「古見のサキシマスオウノキ群落」は国の天然記念物に指定されている。鹿児島県内では奄美大島龍郷町を北限にして奄美市住用、瀬戸内町に分布する。群落としては住用川のマングローブ(北緯28度15分09.9秒、東経129度24分32.2秒)付近に群落高8m、

胸高直径25cmのサキシマスオウノキが15m四方の群落を形成している。板根高さは40cm前後、長さは1m前後とさほど発達しないが、オキナワアナジャコの巣穴上や駆け上がり部分の塩性湿地に群落をつくり典型的な群落を形成している。瀬戸内町油井に、瀬戸内町指定天然記念物の大径木もあるが群落としては認めがたい。

呑之浦のサキシマスオウノキ群落は北限地帯にあり、水田および山地林と隣接する群落で、防潮林としても機能し、人々に認識され保護されてきており、その成立を考えると重要な群落である。

呑之浦の湿地は水田の跡地やその前縁に成立して人為的な影響を受けてはいるが、本来水田は農業生産に供するため湿地を改変したものであり、耕作放棄後、地域本来の生態系に復帰しつつあるものである。

東アジアの東端に位置し、熱帯から温帯に移行する奄美地域に残されている一定規模の湿地は住用川河口部をのぞけば呑之浦にしかない。呑之浦は湿地植生の典型的な自然が現存する数少ない場所といえる。

7 呑之浦の底生動物群集について

呑之浦マングローブ林の湿地に生息する甲殻類、ゴカイ類、貝類、魚類等の底生動物群集について、鹿児島大学理学部佐藤正典教授からの報告である。

(1) 調査日時と方法

春(2009年3月12日)、夏(2009年6月23日)、冬(2010年1月30日)の3回、大潮の干潮時前後に、主に「見つけ取り」による調査を行った。ただし、2009年3月には、環境省(2007)による全国干潟調査の方法に準じて、以下のような方法で調査を行った。

- 1) 表面生物採集: 干潟横断線に沿った上部、中部、下部、それぞれで5分間、見つけ取り採集(塩生植物の内部や転石下も含む)を行なった。
- 2) 底質中生物採集: 干潟横断線に沿った上部、中部、下部、それぞれで10分間、スコップで底泥を掘り返し(深さ約25cm)、肉眼で生物を探し出した。
- 3) 特定の場所での定量採集: 底泥を、スコップ3すくい分(縦25cm×横25cm×深さ25cm)すばやく掘り出し、バケツに入れ、それを適量ずつ、1mm目の篩で海水に浸してふるい、篩上に残った生物を採集した。

奄美加計呂麻島 呑之浦マングローブ干潟の底生動物相
 採集年月日:2009年3月12日, 2009年6月23日, 2010年1月30日

門	綱、目	種名(和名)	学名	2009年 3月	2009年 6月	2010年 1月	備考
刺胞動物門	花虫綱 イソギンチャク目	ムシモドキギンチャク科の一種	Edwardsiidae gen. sp.	●	●		最大密度2000個体/m2
	花虫綱 イソギンチャク目	タテジマイソギンチャク近似種		○			
	ヒドロ虫綱	カツオノエボシ		○			漂着
紐形動物門		ヒモムシ類の1種		●	●		
軟体動物門	腹足綱 古腹足上目	クルマチグサ	<i>Eurytrochus affinis cognatus</i> (Pilsbry, 1903)	●			
	腹足綱 古腹足上目	カンギク	<i>Turbo (Lunella) coronatus coronatus</i> (Gmelin, 1791)	○			
	腹足綱 アマオブネ上目	カノコガイ	<i>Clithon (Clithon) faba</i> (Sowerby II, 1836)	●			
	腹足綱 アマオブネ上目	リュウキュウアマガイ	<i>Nerita (Heminerita) insculpta</i> Recluz, 1841	●			
	腹足綱 アマオブネ上目	アマオブネガイ	<i>Nerita (Thelostyla) albicilla</i> Linnaeus, 1758	●			
	腹足綱 アマオブネ上目	アマオブネガイ科の一種	Neritidae gen. sp.	●			
	腹足綱 アマオブネ上目	マングローブアマガイ	<i>Nerita (Nerita) undulata</i> Gmelin, 1791	●			
	腹足綱 吸殻目	アラレカニモリガイ	<i>Cycomorus petrosus</i> (Wood, 1828)	●			
	腹足綱 吸殻目	ウミナシ類の1種	Batillariidae gen. sp.	●	●		
	腹足綱 吸殻目	フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A. Adams, 1855	●			オヒルギ幹に登る
	腹足綱 吸殻目	カワザンショウ科の一種	Assimineidae gen. sp.	●			
	腹足綱 吸殻目	ヒメウズラタマキビ	<i>Littoraria (Littorinopsis) intermedia</i> (Philippi, 1846)	●*			
	腹足綱 吸殻目	ヒロウネレイシダマシ	<i>Cronia margariticola crassulnata</i> Hedley, 1906	●			
	腹足綱 吸殻目	シロイボレイシガイダマシ	<i>Morula nodicostata</i> (Pease, 1868)	●			
	腹足綱 吸殻目	ヒメテツヤタテ	<i>Zierliana woldemarii aethiops</i> (Reeve, 1845)	●			
	腹足綱 吸殻目	クワイロムシロ	<i>Zeuxis olivaceus</i> (Bruguiere, 1789)	●			
	腹足綱 吸殻目	カゲロウヨフバイ	<i>Zeuxis</i> sp.	●			
	腹足綱 吸殻目	イボヨフバイ	<i>Nassarius (Nassarius) coronatus</i> (Bruguiere, 1792)	●			
	腹足綱 吸殻目	ムシロガイ類の1種	<i>Nassarius</i> sp.		●		
	腹足綱 吸殻目	タマガイ科の1種			●		
	腹足綱 有肺目	インアワモチ近似種	<i>Peronia</i> sp. ?	●	●		
	腹足綱 有肺目	ゴマセンベアワモチ	<i>Platevindex cf. mortoni</i> Britton, 1984	●			
	腹足綱 有肺目	ナガオカミミガイ	<i>Auriculastra subula</i> (Quoy et Gaimard, 1832)	●			
	腹足綱 有肺目	キヌカツギハマシノミガイ	<i>Melampus (Melampus) sincaporensis</i> Pfeiffer, 1855	●			
	腹足綱 有肺目	クロヒラシノミガイ	<i>Pythia pachyodon</i> Pilsbry et Hirase, 1908	●			
	二枚貝綱 イガイ目	クジャクガイ	<i>Septifer bilocularis</i> (Linnaeus, 1758)	●			
	二枚貝綱 カキ目	ケガキ	<i>Saccostrea kegaki</i> Torigoe et Inaba, 1981	○			
	二枚貝綱 フネガイ目	アオカリガネガイ	<i>Barbatia obtusoides</i> Nyst, 1848	●			
	二枚貝綱 マルスダレガイ目	アラスジケマンガイ	<i>Gafrarium tumidum</i> (Röding, 1798)	●			
	二枚貝綱 マルスダレガイ目	キヌダゲマキ	<i>Solecurtus divaricatus</i> (Lischke, 1869)	●			
	二枚貝綱 マルスダレガイ目	イオウハマグリ	<i>Pitar (Pitarina) sulfurea</i> Pilsbry, 1904	●*			
	二枚貝綱 マルスダレガイ目	ホノソジイナミガイ	<i>Gafrarium pectinatum</i> (Linnaeus, 1758)		●		
	二枚貝綱 マルスダレガイ目	不明種	<i>Nitidotellina</i> sp. ?		●		
二枚貝綱	不明種			●		ホムシムに付着	
環形動物門	多毛綱 スピオ目	スピオ科の一種	Spionidae gen. sp.	●			
	多毛綱 サンバゴカイ目チロリ科	チロリ科の一種				●	
	多毛綱 サンバゴカイ目ゴカイ科	コケゴカイ	<i>Ceratonereis erythraeensis</i>			●	
	多毛綱 サンバゴカイ目ゴカイ科	キレコミゴカイ	<i>Ceratonereis japonica</i>			●	
	多毛綱 サンバゴカイ目ゴカイ科	クマドリゴカイ	<i>Perinereis cultrifera</i>		●		
	多毛綱 イソム目	ギボシイソム科の一種	Lumbrineridae gen. sp.	●			
	多毛綱 イソム目イソム科	イワムシ?	<i>Marphysa</i> sp.			●	
	多毛綱 イソム目イソム科	イワムシ近似種	<i>Marphysa</i> sp.			●	
	多毛綱 ウミケムシ目	ウミケムシ科の一種	Amphinomidae gen. sp.	●			
	多毛綱 イトゴカイ目イトゴカイ科	シダレイトゴカイ近似種	<i>Notomastus</i> sp.		●	●	
	多毛綱 イトゴカイ目イトゴカイ科	イトゴカイ科の一種			●	●	大型、体後部に鰓
	貧毛綱	貧毛類の一種		●			
	ユムシ動物門	ユムシ綱	ユムシ類の一種			●	
星口動物門	スジホシムシ綱	スジホシムシ科の一種	Sipunculidae gen. sp.	●	●		
節足動物門	顎脚綱有柄目	エボシガイ類の一種				●	メナゴオサガニの体側に付着
	軟甲綱十脚目クルマエビ科	フトミノエビ	<i>Melicertus latisulcatus</i> (Kishinouye, 1896)	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目テッポウエビ科	テッポウエビ科の一種			●		
	軟甲綱十脚目テナガエビ科	スネナガエビ	<i>Palaemon concinnus</i>	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目ヌマエビ科	ヒメヌマエビ	<i>Caridina serratirostris</i>				鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目オキナワアナジャコ科	オキナワアナジャコ?	<i>Thalassinia anomala</i> (Herbst, 1804)	○**			
	軟甲綱十脚目アナジャコ科	ヨコヤアナジャコ?	<i>Upogebia ?yokoyai</i>	●		●	鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目ハサミシヤコエビ科	ハサミシヤコエビ	<i>Laomedea astacina</i> de Haan, 1849	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目ベンケイガニ科	カクベンケイガニ属の稚ガニ	<i>Parasesarma</i> sp.	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目エンコウガニ科	メクラガニモドキ	<i>Typhlocarcinops canaliculata</i> Rathbun	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目モクズガニ科	ケフサヒライノモドキ	<i>Ptychognathus barbatus</i> (A. Milne Edwards, 1873)			●	鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目モクズガニ科	タイワンヒライノモドキ	<i>Ptychognathus ishii</i> Sakai, 1939	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目モクズガニ科	タイワンアシハラガニ	<i>Helice formosensis</i> Rathbun, 1931	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目モクズガニ科	ミナミアシハラガニ	<i>Pseudohelice quadrata</i> (Dana, 1851) = <i>Helice leachi</i> Hess,	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目モクズガニ科	オキナワヒライノガニ?	? <i>Gaetice unguilatus</i> Sakai, 1939	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目モクズガニ科?	アカイソガニ属?	<i>Cyclograpsus</i> sp. ?		●		鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目ワタズガニ科	ヒラワタズガニ	<i>Micippa platipes</i>			●	鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目コブシガニ科	マメコブシガニ	<i>Philyra pisum</i> De Haan, 1841			●	鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目ベンケイガニ科	フタバカクガニ	<i>Perisesarma bidens</i> (de Haan, 1835)	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目ムツハリアケガニ科	カワスナガニ	<i>Deiratonotus japonicus</i> (Sakai, 1934)	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目Dotillidae	ミナミチゴガニ?	<i>Hyloplex integra</i> (Tesch, 1918)	●			鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目スナガニ科	オキナワハクセンシオマネキ	<i>Uca perplexa</i> (H. Milne Edwards, 1837)		○		写真撮影
	軟甲綱十脚目スナガニ科	ベニシオマネキ	<i>Uca crassipes</i> (Adams et White, 1848)		○		写真撮影
	軟甲綱十脚目スナガニ科	ルリマダラシオマネキ	<i>Uca tetragonon</i> (Herbst, 1790)		○		写真撮影
	軟甲綱十脚目オサガニ科	タイヨウオサガニの稚ガニ?	<i>Macrophthalmus ?pacificus</i>		●	●	鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目オサガニ科	ヤマトオサガニ	<i>Macrophthalmus japonicus</i> (de Haan, 1835)		●		鈴木廣志同定
	軟甲綱十脚目オサガニ科	メナゴオサガニ	<i>Macrophthalmus verreauxi</i> H. Milne Edwards, 1848		●	●	鈴木廣志同定
軟甲綱等脚目	ワラジムシ類の1種	<i>Ligia</i> sp.?		●			
棘皮動物門	ナマコ綱無足目	ムラサキケルマナマコ	<i>Polycheira fusca</i> (Quoy et Gaimard, 1833)	●			
	クモヒトデ綱クモヒトデ目	クモヒトデ類の1種	Ophiurida gen. sp.		●		
脊索動物門	硬骨魚綱スズキ目	ミナミトビハゼ	<i>Periophthalmus argentilineatus</i> Valenciennes, 1837	●			荻原豪太同定
	硬骨魚綱スズキ目	ミナミトビハゼ(小さい個体)	<i>Favonigobius reicheri</i> (Bleeker, 1853)		●		荻原豪太同定
	硬骨魚綱スズキ目	クモハゼ(大きい個体)	<i>Bathygobius fuscus</i> (Rüppell, 1830)		●		荻原豪太同定

●: 標本採集, ○: 標本なし(目視観察)

*: 殻のみ確認

** : 巢孔のみ確認

採集した生物は、80%エタノールで固定した。底泥を採取した穴にたまった浸出水の塩分をサリノメータ（YSI - Model - 30）で測定した。

(2) 調査結果

干潟底泥中の塩分は、24 - 32‰であった。

3回の調査で、合計85種の底生動物が確認された。まだ種名が同定できない種もあるが、主要な生物群は、節足動物門十脚目（エビ・カニ類、26種）、軟体動物門腹足綱（巻貝類、25種）、環形動物門多毛綱（11種）、軟体動物門二枚貝綱（9種）であった。

特筆すべき種

1) ムシモドキギンチャク科の一種

3月に干潟下部の優占種として出現した。広範囲に高密度で（最大密度：約2000個体/m²）生息していた。2002年 - 2004年に日本全国157カ所で行われた干潟調査（環境省、2007）では、ムシモドキギンチャク科のミナミムシモドキギンチャク *Edwardsianthus gilbertensis* が奄美大島の笠利湾と八重山地方の干潟で確認されているが、これと同種かどうかはまだ不明である（現在、柳研介氏（千葉県立中央博物館）に分類検討を依頼中）。

2) ルリマダラシオマネキ

国内での主な生息地は沖縄島以南で、しかも、どこでも生息数が少ない種である（環境省、2007）（鹿児島県レッドデータブックによれば、本種の分布北限は奄美大島とされている）。2002年 - 2004年に日本全国157カ所で行われた干潟調査（環境省、2007）では、沖縄島の億首川と石垣島の宮良湾でしか見つかっていない。今回生息が確認された呑之浦は、本種の分布北限に近く、また、比較的個体密度が高いという点でも、貴重な生息場所である。

3) その他の鹿児島県レッドデータブック掲載種

- カノコガイ（準絶滅危惧）
- マングローブアマガイ（絶滅危惧I類）
- フトヘナタリ（準絶滅危惧）
- ナガオカミミガイ（絶滅危惧II類）
- キヌカツギハマシイノミガイ（絶滅危惧I類）
- カワスナガニ（準絶滅危惧）

この他に、コメツキガニ科の日本未記録種と思われる種が確認されている（現在、鈴木廣志氏（鹿児島大学水産学部）に分類検討を依頼中）。

8 呑之浦の保護について

呑之浦のマングローブ林およびその周辺林についてその価値は前述のとおり、海岸及び沙地植物群落の代表的なものであり、オヒルギ群落やサキシマスオウノキ群落の著しい植物分布の限界地（北限地帯）として価値があるが、干潟をすみかにしたり漂着、立ち寄りたりする動物群集も充実し、南西諸島を代表する重要かつ貴重な湿地となっており、天然記念物指定の基準を満たしている。

この干潟域の保全のためには、干潟の保護だけでなく干潟に流入する表層水を提供する周辺の環境が保護されることが望まれる。可能であれば、マングローブ林および半マングローブ林に接する内陸側の森林やマングローブ干潟への潮流の侵入を緩和する入り江の熱帯海岸林であるアダン林を含む周辺域までの範囲と考えられる。

地域の自然を保護するにはその価値について地域の方々を知る機会が必要であり、そのために起こる攪乱をできるだけ小規模なものになるよう対策を考えておく必要がある。呑之浦でオヒルギ群落の所在するところはかつては農耕地で呑之浦集落から歩いて農作業に通ったところと考えられるが、現在はここへ通う道も樹木で覆われ、陸路から行くことは考えられない状況になっている。道路からつながる小規模な遊歩道を確保するとか、海上からのチャーター船等が発着する接岸場をマングローブ林および周辺林に影響のない場所に確保することも必要である。

謝辞

本調査は文化庁の依頼を受け実施したものである。瀬戸内町および瀬戸内町観光協会ガイド部会には現地調査に際し情報の提供を受けた。調査に際し、民宿ハーラには渡船に困難な場所ながら現地まで海上から案内していただいた。

東京大学医科学研究所服部正策准教授、鹿児島大学理学部宮本旬子准教授および研究室の諸氏には現地調査で同行していただき様々な示唆をいただいた。鹿児島大学理学部佐藤正典教授には干潟の動物群集についての調査およびとりまとめ等についての原稿をいただいた。鹿児島大学水産学部鈴木廣志教授には甲殻類の同定および甲殻類に関するコメントをいただいた。

植生の群落区分については横浜国立大学大学院教授大野啓一氏に御指導をいただいた。また、篠崎チサ氏には採集植物の標本化作業および整理について

ご尽力をいただいた。多数の方々の尽力によってこの報告書は作成された。御協力の方々に深甚の謝意を表するものである。

参考・引用文献

- 1) 初島住彦 (1986) 改訂 鹿児島県植物目録 290pp. 鹿児島植物同好会. 鹿児島
- 2) 堀田満編 (2002) 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 植物編 657pp. 鹿児島県
- 3) 環境省自然環境局・(特活) 日本国際湿地保全連合 (編) (2007) 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書, 236pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田,
- 4) 宮城康一 他 (1991) 南の島の自然観察 194pp. 東海大学出版会 東京
- 5) 宮脇 昭 編著 (1989) 日本植生誌 沖縄・小笠原 637pp. 至文堂. 東京
- 6) 宮脇 昭・奥田繁俊 編著 (1990) 日本植物群落図説 九州 784pp. 至文堂. 東京
- 7) 宮脇 昭 他 (1974) 名瀬市の植生 128pp. 名瀬市. 鹿児島
- 8) 大野照好・寺田仁志 (1996) 徳之島の植生 99 - 113pp. 鹿児島の自然調査事業報告書 奄美の自然 鹿児島県立博物館
- 9) 小滝一夫 (1997) マングローブの生態 - 保全・管理への道を探る - 138pp. 信山社 東京
- 10) 寺田仁志 (1986) 加計呂麻島の海岸植生 11 - 42p 大島紀要 第2号 鹿児島県立大島高等学校 鹿児島県



写真6 ソナレシバ群落

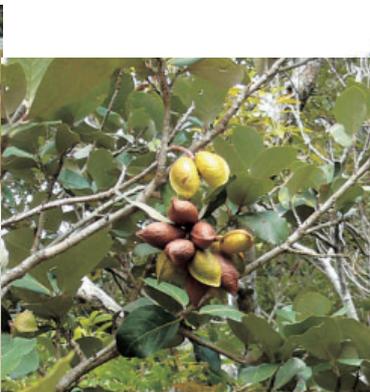


写真7 サキシマスオウノキの果実



写真8 アダン群落



写真9 ベニシオマネキ



写真10 ルリマダラシオマネキ



写真11 サキシマスオウノキ